

Title	大正・昭和期の阪神間亡命ロシア人社会-モロゾフ家及びその周囲の人たちを中心に
Author(s)	ポダルコ, ピョートル E
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/43288">https://hdl.handle.net/11094/43288</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ほたるこびよーとるいー ポダルコ・ピョートル・E
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 17161 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	大正・昭和期の阪神間亡命ロシア人社会 －モロゾフ家及びその周囲の人たちを中心に
論文審査委員	(主査) 教授 藤本和貴夫  (副査) 教授 金子 元臣 教授 中 直一

### 論文内容の要旨

本論文は、大正期から昭和前期において阪神間に居住した白系ロシア人の社会をモロゾフ家及びその周囲の人たちを中心として考察したものである。在日亡命ロシア人社会の研究が国際的によく始められたことを考えると、日本における亡命ロシア人社会のひとつの中心であった阪神間の亡命ロシア人社会の研究は大きな意味をもつものであると考えられる。

「はじめに」で本研究の目的が、神戸をはじめとする関西地域における居留白系ロシア人社会と彼らの日本社会に与えた影響を歴史的・文化的視点から考察することを明らかにしている。「主な資料」は、在日ロシア外交官関係資料、亡命ロシア人の回想録・自伝、日本の法務省および外務省の資料、統計集などである。さらに「先行研究」で、亡命ロシア人の研究をはじめとして、日本国内外の研究者による白系ロシア人の研究を検討している。

第I部（「白系ロシア人と日本」）は4章よりなる。

第1章（「エミгранト（亡命者）の登場」）では、ロシア革命前までは日本在留ロシア人の数は少なかったが、革命をきっかけに亡命者の流入によってロシア人が増え、その法的地位が問題となったこと、ならびに亡命者に関する当時の統計の正確度を論じた。

第2章（「亡命ロシア人に対する日本政府の政策」）では、亡命者の入国制限を意味する「現金提示制度」など日本の外国人に対する閉鎖性やその他日本政府の様々な対応が、日本在留ロシア人の数が増えるのを抑えたこと、関東大震災が亡命ロシア人の国外と関西への移住を促進したこと、さらに日ソ国交樹立後、彼らの「無国籍」への地位の転換がいかなる交渉によって行われたか、を論じている。

第3章（「西欧化への窓口」－神戸・阪神全地域の魅力）には、日本の他の地域と比較して白系ロシア人の多かった神戸の歴史的な特徴及び外国人の目を見た阪神地域の魅力について考察し、このような神戸の貿易をになった神戸外国人居留地と関東大震災後の神戸外国人委員会の活動およびその小委員会によるロシア難民への援助活動を明らかにしている。

第4章（「来日する亡命ロシア人の分類－亡命時期でみる特徴の推移」）では、来日する亡命ロシア人を、亡命時期によって「第一次群」、「第二次群」、「第三次群」の3つに分け、その特徴を分析した。「第一次群」と「第二次群」の境界は関東大震災であり、「第二次群」は「第一次群」に比べて庶民階級出身者が多く、日常生活に対する現実的な態度が備わっていることが、日本での成功の要因となったことを明らかにしている。

第Ⅱ部は、「神戸在留白系ロシア人社会」で、8章よりなる。

第1章（「亡命生活の諸問題」）では、白系ロシア人の日常生活の困難点を言語、教育、伝統、日本の制度などから検討し、彼らのアイデンティティを支えることになったロシア正教、亡命ロシア人協会・団体の活動の役割を明らかにしている。特に、亡命者の団体としての「神戸露国避難民協会」の活動の重要性を明らかにしている。

第2章（「亡命者の商人の活動」）は、白系ロシア人の多くが、羅紗売りなどの小売り行商からはじめ、そのうち幾人かが会社を設立し、商業活動に成功したことを明らかにしている。

第3章（「阪神間における文化の展開と来日ロシア人たち」）では、宝塚歌劇団をはじめ、阪神間における文化の展開に貢献した来日ロシア人たち（音楽家・芸術家など）および亡命ロシア人教師（ロシア語を含む外国語教鞭）について論じている。

第4章（「関西に居留したロシア人外交官たち」）では、帝政大使館の閉館後、関西に居を移したロシア人元外交官たちのその後の活動を明らかにしている。特にアプリコソフとヴェスケーヴィチについては多くの新しい事実を明らかにしている。

第5章（「モロゾフ一族とその亡命生活の経験」）では、日本においてチョコレートで有名なモロゾフ製菓を創設したフォードル・モロゾフの日本での活動をインタビューを交えて追跡し、モロゾフ家と他の亡命者との類似点と相違点、彼の行商から洋菓子製造への転換、日本人とのパートナーシップなど1人の成功者の軌跡を通して亡命ロシア人が日本で成功するための諸条件を考察している。

第6章は、モロゾフと並んで日本で有名であるゴンチャロフ製菓の創立者を検討した。本人については早く日本を去ったので多くの点が不明のままである。本論ではモロゾフの経験を通してゴンチャロフの「ナゾ」の解明を試みている。

第7章では、神戸在住の亡命者が書いた回想録・自伝をとりあげ、彼らの日本観・パーソナリティなどを論じている。モロゾフの回想録をはじめ、アプリコソフ、トルスタヤなどの回想録に基づいて、彼らの日本観のちがいはなぜ生れたのか、を論じている。

第8章では、＜第三次群＞にあたる第二次大戦後の白系ロシア人の状況およびその特徴について論じている。

「むすび」では、白系ロシア人が日本において、一時的には最大の外国人のグループとして、様々な分野で活躍しながら、大正・昭和期の日本の文化、経済などに貢献したこと、彼らにはそうした意識はなかったが、日本とロシアを文化的に近づける優れた活動家になったこと、さらに阪神間の白系ロシア人社会は1920-30年代にピークに達したが、20世紀末までには消えてしまったことなどを結論づけている。要因は、高齢をはじめ、戦後の日本における生活難および日本社会の受容性の問題などである。

付属資料として、筆者がフィールドワークの結果、作成又は発見した多くの未発表資料がつけられている。「関東大震災に関する資料」及び「神戸市立外国人墓地の＜ロシア人部＞の名簿」は、それらの一部である。また、本論文に掲載された写真の大部分は、筆者撮影およびインフォーマントになった白系ロシア人より提供されたものであり、これまで未発表のものである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、主としてロシア革命以降に祖国を離れて来日し「白系ロシア人」と呼ばれた人々のうちで、阪神間に居住したロシアからの移住者が働き生活をする中で、日本社会とどのような関係を結んだか、またその過程でどのような摩擦や障害が生じ、そのなかから亡命ロシア人たちがどのような教訓を引き出したかを、これまで知られていなかったさまざまな資料を掘り起こすことによって明らかにしたものである。

したがって、本論文の第1の貢献は、留学生という立場を最大限に生かし、日本に埋もれていた多くの「白系ロシア人」関係の資料を見つけ出し、さらにインタビューなどのフィールドワークによって、ヨーロッパではすでに長い伝統をもっている亡命ロシア人研究を、日本においても同様のレベルで根付かせる役割のひとつを果たしたことにあ

第2は、日本で最初にチョコレート会社を立ち上げたモロゾフ家の幾世代かを中心に置きつつ、主として彼等と他の亡命ロシア人たちとの人間関係を明らかにするなかで、これまであまり繋がりがよく見えなかったロシア人亡命者社会の広がり、その日本社会における位置がより明確にされたことである。

第3は、阪神間という国際的なモダニズムの中心地のひとつに焦点を当てたことで、音楽や絵画、宝塚歌劇団などに対する亡命ロシア人たちの日本文化への影響の大きさが自然と明確にされたことである。

問題としては、亡命ロシア人はソ連という政治的な国家との関係をぬきには日本でも生きぬくことが困難であり、そのような国際社会の流れのなかでの、彼らの微妙な立場というものをどこまで明らかにできたかという点では不満が残る。しかし、そのことで、米国やロシアなどにおける新たな多くの写真や図版の発見などをも入れて、本論文のすぐれた成果は損なわれるものではない。本審査委員会は本論文を博士（言語文化学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。